

大人の 社会科 見学

常識にとらわれない、
30年先を見据える銭湯の物語



「日常の中の非日常」が、 街をわが家にする。小杉湯



キレイで清潔感あふれる浴場。



神社仏閣を思わせる宮造りの木造建築。中央のカーブを描いた唐破風屋根は、関東大震災の復興シンボルとして当時の銭湯建築で流行した。



小杉湯 3代目 平松佑介さん

話し声のかわりに湯の音がささやき、桶の音がこだまする。今の小杉湯は静けさも自慢です…。東京・杉並区の高円寺純情商店街を抜けると、唐破風(からはふ)屋根の銭湯が住宅街の一角にたたずんでいた。コロナ禍に揺れる平日の午後4時。やわらかな湯に浸かって目を閉じると、ポチャリとはじける音が天井に響いて、脱衣場の素敵なメッセージがよみがえってきた。

昭和8年創業の小杉湯の来客数は平日約500人、土日約900人。都内の平均は約120人だから健闘ぶりは目覚ましい。逆風の中で2代目の父は地域を大切に、ファンを増やした。3代目の平松佑介さん(41)は子どもの頃から、楽しそうに仕事をする父の背中を見て、祖父からスタートした、小杉湯という駅伝のタスキをいつかは自分が受け継ぐと決めていた。大学卒業後、一般企業に就職したのは、一度は広い世界で挑戦してみたかったから。営業成績は全国トップ。ベンチャー企業の立ち上げにも加わって、36歳の時、小杉湯に戻った。そして3年後の令和元年、父から経営を引き継いだ。

「僕の役割はタスキの継承。30年後の小杉湯を考えています。銭湯とは何か、必死に考えた」。

小杉湯

〒166-0002 杉並区高円寺北3-32-2
電話 03-3337-6198 ホームページ <https://kosugiyu.co.jp/>

父と意見を戦わせながら、“銭湯のある暮らし”を経験してもらおうプロジェクトが始動した。銭湯を舞台にしたライブやフェスは大盛況。若者たちの情熱に可能性をみて、隣接するアパート跡地に昨年春、「小杉湯となり」をオープンさせた。コワーキングスペース、食堂を備えた会員制の施設では、小杉湯ファンが、思い思いの時を過ごしている。

銭湯とは…「ケの日のハレ」、つまり、日常の中の非日常。湯を楽しみ、食事をして、仲間とおしゃべり。一日の中のちょっと贅沢な時間と再定義した。「小杉湯はなれ」もつくり、点が線、面になれば、街は我が家になる。「若者は緩いつながりを求め、銭湯はそのハブになれる。ライバルはスタバやネットフリックス」と笑顔で語る。直木賞作家ねじめ正一が小説の舞台にした人情の街・高円寺で、新たなコミュニティが生まれようとしている。



新しいコミュニティの場となっている「小杉湯となり」。



三沢明彦(みさわあきひこ)

1956年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、1979年読売新聞社入社。社会部記者として活躍し、北海道支社編集部長、写真部長、編集局次長を歴任。その後、旅行誌売出版社事務取締役編集長、福岡放送常務取締役(報道、制作担当)、静岡第一テレビ常務取締役(編成、報道、制作担当)、現在は静岡第一テレビ顧問。